

節分も終わり、暦の上では 春です。2020年も あっという間に 1か月半が過ぎました。気がつけば 今年度の歩みも、残すところ60日を切りました。保育園生活にすっかり馴染んで頼もしくたくましく成長した 目の前の子ども達ひとりひとりの姿を見つめながら、4月の頃の、新しい自分の居場所に戸惑いを感じ ちょっぴり緊張していたそれぞれの愛らしい笑顔を想うと、感無量の喜びです。ひとりひとり皆、自分自身の道をそれぞれの歩幅で一生懸命 歩いてきた日々。様々な出会いや たくさんの経験… そのひとつひとつを、自らが前進するためのエネルギーへと変えている子ども達の ひたむきな姿勢は、人としての 生きる原点であり、希望であり、宝です。つのぶえ保育園を通して、このひとりひとりとの貴い出会いを与えて下さった神様に感謝します。特に今は、年長組の子ども達と共に過ごす時が愛おしく このまま時が止ってほしいとさえ願うこの頃ですが、仲間としての大切な絆を確かめ合い、互いの笑顔を心に刻み合える温かな毎日を神様に祈りながら、イエスさまとともに12人らしく元気いっぱい歩いていきたいと思います。

さて、およそ2週間前、先月末のことでした。都内では前日の夜遅くから雪が降るほどに寒く千葉県内でも強い風と冷たい雨が1日中降り続いていました。ちょうど午睡中だったので園内は静まり返り、嵐のような激しい風と雨音が 窓の外で繰り返して響いていました。ところが、ふとその嵐に打ち付けられている木々の唸り声と共に、「ミィミィ…ミィミィ…」と か細い鳴き声が聞こえたような気がしました。仕事の手を止め 耳を澄ましてみました。かすかに、でも確かに！猫だ！しかも赤ちゃん！と思いました。急いで事務室の窓を開けて探しましたが姿はありません。私は思わず廊下に飛び出しました。そして 流しの脇のサッシに手をかけた瞬間、「あっ…！いた」掃除用のモップとバケツの陰で びしょ濡れの仔猫がぶるぶる震えながらうずくまっていた。そのあどけない瞳はガラス越しに まっすぐ私を見つめ、小さな口で 切なそうに「ミィミィ」と泣き続けていました。そこで私は咄嗟にサッシの鍵を外すと、その音にハッとしたように身構え、素早く後ろ向きになり、そのまま玄関の方へ走って行ってしまったので、慌てて追いかけると、2つの傘立ての狭い隙間から奥へ入り込み、さっきと同じようにこちらを向いて丸くなりました。この酷い嵐の中を出て行かなかったことにホッとしながら、しばらくそっと様子を窺っていると真っ黒に澄んだ小さな瞳で「ミィミィ」とひたすら泣き続ける声が雨音と共に聞こえてきました。“こんな寒さの中で 死んじゃうかもしれない！何とかしなくちゃ！”と、私はこの仔猫の姿にもう居ても立っても居られなくなり、気が付くと いるか組の皆のもとへ 駆けあがっていました。私の話を聞いた途端、子ども達はビックリしてすぐに階段を下り そーっと近づいて行き仔猫を見つけると「かわいい！」「濡れてる～」「寒そうだよ」「助けてあげたいよ」「僕たちで守ろう！」と、口々に温かな言葉を交わし合い「お腹すいてるんじゃない？」「お水も！」「何を食べるかな」そこからは子ども達も私も、仔猫のために考えては夢中で提案し合い、あちこち走り回りました。その騒ぎに、先生たちやお昼寝から起きた他のクラスの子も達も集まってきました。その間も仔猫の軀は激しい風と冷たい雨に晒されて震えていました。「せんせ、お家を作ってあげようよ」「冷たいと風邪ひいちゃうから、座るところはクッションみたいに暖かくしてあげればいいよ」と皆で力を合わせて段ボールを切り 組み立てて 可愛いお家が出来ました。屋根にはマジックで『ミーちゃんのいえ♡』と素敵な表札。いつの間にか“ミーちゃん”と名付けられていました(笑)完成したお家の中にバスタオルで作ったクッションを敷き、玄関のテーブルの下に置いておくとしばらくして「入ったヨ！」と様子を見ていた先生たちの静かな歓声と拍手が聞こえてきました。急いでそーっと見に行ってみると「わ～い！ほんとだ」「あ～よかった～」「これで寒くないよ」「可愛いね～」「寝ちゃったネ」「きっと安心したんだよ」「ミーちゃん、お家 気に入ったんだね」

皆の優しい眼差しの先には お家の中で丸くなりうとうとしているミーちゃんの姿がありました。ぐっしょり濡れて震えていた小さな軀も 時間が経つにつれて毛並みがふっくらしてきたように見えて、皆で安心しました。赤ちゃん用のビスケットを砕いてお湯に浸して柔らかくしてお皿に入れて差し出すと小さな舌でぺろぺろしながら味わっていました。その様子を子ども達は笑顔で見守りながら「いっぱい食べな！」「ここにいればだいじょうぶだよ」と代わる代わる穏やかに話しかけていました。「ミーちゃんのお母さんは心配してるよね」「迷子になっちゃったのかな」目をつぶって気持ちよさそうに眠り始めたミーちゃんをガラス越しに眺めながら 様々な思いを巡らしては ほんとうに心配そうに 互いに顔を見合わせ 言葉を掛け合っていた子ども達でした。

「たくさんの雨が降っていてとても寒い夜の間もミーちゃんのことを守ってください」と神様に一生懸命お祈りをして 子ども達はそれぞれに後ろ髪をひかれるような様子で帰って行きました。その夜は、私も心配で玄関口まで つい何度も足を運び、寝顔を見てホッとするとまた戻っては仕事をしていました。真夜中に目を覚まし「ミィミィ…」鳴いていたのでお腹がすいたのかなとご飯を温め少しつぶして鰹節のふりかけをかけて そっと差し出してみると、小さな顔を お皿に突っ込んで美味しそうに食べ始め、あっという間に平らげてしまいました。お水もごくごく飲みお腹いっぱいになったのか、そのまま目を閉じて また 安心しきった様子で眠ってしまいました。

「明日はお天気になるって。元気が出たらお母さんのところへちゃんと帰るんだよ」と声をかけ小さな命の無事を神様に祈りつつ雨の中をそっと帰宅しました。翌朝は 予報の通り 快晴でした。ミーちゃんの姿は もうどこにもありませんでした。夜、雨が上がった頃に 帰ってしまったのか明るくなってから出て行ったのか…。子ども達は ガッカリでした。「どこ行っちゃったのかな」心配している子ども達に「今頃はきっとお母さんに会えて 元気に遊んでるんだよ。大丈夫！」そう信じて神様にお祈りしました。「優しくて温かな皆の心をミーちゃんは嬉しかったと思うよ。でも もう一度会いたいね。」「もう一回 遊びに来てほしいな」「お家を置いてけば帰って来るよ」そんなことを話していた3日後のことでした。りす組の部屋で職員の終礼をしていた最中でした。

「ミィミィ」と鳴き声が聞こえたような気がした直後、窓の外にミーちゃんの姿が見えたのです。急いで窓を開けてみると、確かにミーちゃんです。しかも、お母さんらしき大きな猫ともう1匹仲間を連れ3匹で戻って来たのです！「ミーちゃん！お帰り！元気だったんだね！よかった」とその姿が嬉しくて 思わず声をかけてしまいました。すると、私の声に応えてくれたかのようにくるっと振り向いて、窓から見ている私たちに軀を真正面に向けてしっかりと前足を揃えて座りほんの数秒間でしたが、その姿勢のまま クリクリのあどけない瞳をまっすぐに向けていました。そのまなざしは とても柔らかで、まるで私たちに言葉を語りかけているかのように見えました。ミーちゃんは それからゆっくりと軀の向きを変えて 2匹のもとへ早足で行ってしまいました。この後、私は先生たちと「見た？ 今のミーちゃんの姿！」「うん！あれは 絶対 おれだったよね」「ジーっとこっちを見ていましたよね。」「ピッと背筋を伸ばしてたし前足も揃えてた！」などと、皆と一緒になんだか嬉しくて、ちょっぴり大人びた顔つきに変わった仔猫との3日ぶりの再会を、信じられない喜びと自分勝手な想像で ドラマチックに演出しながら感激に浸ってしまいました。翌週、子ども達にその話をすると 大喜びで園庭の中をあちこち捜していましたが ミーちゃんはあの日以来 一度も姿を見せることはありませんでした。それを想う度、やはりあれは わざわざ “ありがとう” を伝えに来てくれたに違いない！と信じたい気持ちになってしまう私たちです。また雨が降った時に入れるように…と、ミーちゃんのために お家をそのまま残してあげている心優しい子ども達です。この温かな愛を 神様がきっとミーちゃんに届けてくださると信じます。この世の生きとし生けるすべての命に神様の大きな慈しみと祝福がありますように(石田 記)

『最も小さい者たちの一人にしたことは、すなわち わたしにしたのです。(マタイ 25:40)』